

シーン7

レッド凌辱…おっぱい母乳改造触手と催眠勝負 レッド視点

「そうですねー、レッドさんのやる気を出すためにこれから1時間、5回イかなかったらボーンナス! というのはどうでしょ?」

私をホワイトと一緒につるしていた場所からは解放した後で、ブラック・フォビュラスはそう言って凌辱内容の提案してきた。

なお、今度は数メートル離れたところで片手、両足を手錠で床に固定されてさっきよりも屈辱的な体勢を取らされているのであまり変化はない。一応、ホワイトにはじゃれつくだけで危害を加えるような動作は見られないが、この1時間で何とかホワイトと一緒に脱出する手掛かりぐらいはつかんでおきたいところだ……

「なら、耐えできればこれを外してくれるというボーナスでもいいのか?」

否定されるだろうが、一番の問題、私の超能力を封じている首輪をさして聞いてみる。

「いいですよ。ただ、ペナルティとしてレッドさんが1回イくことに1つ催眠で何か書きこんじゃうんで、頑張って耐えてくださいね?」

ペナルティはともかく……あつさり、了承されてしまうと逆に怪しい。

「その、首の装置外したくないです?」

「私のセンスじゃないんでさっさと外したいが、催眠の内容次第では1回で全部無意味になっちゃうんじゃないだろうな?」

いや、あまり意味のない質問だな、そもそも最初から信用なんてできるわけもない。

「え、催眠の内容ですか? それは、その時のお愉しみで。大丈夫、全部かっちゃっても正義の味方は続けますよ。たぶん」

「いいだろう。受けて立つよ」

「んふふー、それじゃあ……まず、じゃまなものをとっちゃってー」

「な!?!」

そう言うとフォビュラスはいとも簡単に私の股下と乳房の部分のスキンスーツを破り取った。怪人に改造されたとはいえ簡単に破り取れるようなものでは……

「何をした……まさか」

「あはは、ジュエル・スターズの機密情報からに決まってるじゃないですか。あれ、もしかしてホワイトさんと同じでスキンスーツがあるから純潔守れると思ってました? 残念、むしろ私の思うようにいじっちゃいますからね」

「ふふふ、びりびりに破れて繋がれて、無様に負けちゃったヒロインっぽくてむらむらきちやいます」

自分の乳房を乱暴にいじられるが極力平静を保つ。100%安全とは思ってなかったが、時間を稼ぐ当てが外れてしまったのはまずい。

「すっごい、おっぱい。私のお母さんより一回り大きいんですね。たぶったぶ。ふふ」

「思ったよりも、手ぬるいお遊びだな。これなら1時間は楽そうだ」
本来なら、拷問などで相手を挑発するのは悪手だができるだけ相手を動かして隙を見出したい。

「んー、それじゃあご期待にお応えして……ん、ふあ、あ……ふふふ、どうですか”これ”」
「……人間すらやめたのか」

ブラック・フォビュラスのスカートの両裾からぬるりと人の腕ほどある紫色の触手が生えてきた。ただの飾りではない、触手自身がうねうねと動き、生理的に嫌悪感を引き立てる。
「レッドさん達と戦う準備大変だったんですけどー、こういうことができるようになったからやってよかったですね」

「なんと醜悪な……」

「えー可愛いと思うんだけどな？」

私の評価など意に介さずにブラック・フォビュラスは自身のスカートの中から伸びる紫の鳶というよりは触手を自慢げに撫でる。

「ふふふ、この子たち身代わりとかも作れるんですけど、一番の特徴は、改造ですね」

触手の先端が膨れたと思うと粘液を吹き出しながら4つに裂けて開く。中には、細かいヒダが並んでいてどういう使われ方をするのかは想像したくないな。さらに、触手の口の中央から半透明の針が粘液をまき散らしながら飛び出している。さながらSF映画のグロテスクな生物を目の前で見ることになるとは……

「こんな感じで食いついて、つつぷつと突き刺して中から私の思うように改造しちゃいますね」

「うっ……」

「魔法少女衣装を私のイメージで作ったみたいにな、この触手の触れてる部分を私の思うように改造出来るようになったんですよ。凄いでしょ」

絶句している私をよそにブラック・フォビュラスは片方の触手を手にニコニコと笑いながら近づいてくる。拷問用の訓練が生かせるはず、大丈夫これくらいのことでは負けるわけにはいかない……



「あ、痛くはないですから安心してくださいね。ただ、とっても気持ちよくなっちゃって、刺しただけでイっちゃうかも……ふふふ、それでは、レッドさんのたわなおっぱい、頂いますね」

つつぷつと音が鳴った気がした。確かに痛みは無い、逆のそれが不気味で自分の体内のありえない箇所に異物が入り込んでくる感覚が……

「ふあん、つくひゃ！？ ん、んんん」

「ん、ふあ、レッドさんのおっぱいの中美味しい。分かります？ 今乳首の中をくちゅくちゅ、変えていってるところですよ？ あ、その顔、いいです 気持ちいいの耐えようとぎゅつとなつて、ただの人間を襲うよりもずつとゾクゾクしちやいます」

何だこれは！？ ブラック・フォビュラスの忠告は聞いていたが、ん、はう、つく、乳房の中、細胞一つ一つを、かき回す感覚が、気持ちいなんて、ん、た、耐えないと、こんな！？

「あ、あまりに気持ちよくて忘れるところでした。もちろん、もう片側ちゃんと改造してあげますからね」

「そんな、今でも、こんな……2倍だなて……んん、ひう!？」

「それじゃあ、最後にレッドさんのおまんことアナルもいただきますね。……ん、処女膜ごちそうさまです あ、もちろん痛みは消してありますからね。あはは、そんな顔しないでください。勝負ですよ、勝負。悪の組織には負けないんですよ？ まあ、いつてもちよつとだけドスケベになっていくだけですから、耐えきれなくなったら、無様に盛大におもしろくイっちゃっても構いませんか？ 正義の味方の赤壁あかねさん」

「んんん、んあ!？ ああ、ひやああああ、つく、んぐっ！ うう、はあ、はあはあ……」
口の中に血の味が広がる。無我夢中だったがどうやら自分で唇を噛んでいたようだ……だが、なんとかたえきつた。こんなところでくじけてはスタツフどころか弟、悟にも笑われてしまう。

「あ、痛みで耐えるとか、ベタすぎー、もう、痛いのはだめですよ？ 仕方ないですね、”これ”でちゃんと栓をしておかないと」

触手を絡みつかせたままブラック・フォビュラスは立ち上がり、股間のそれをまじかで見せつけるように私の顔に近づける。20分前に私の胸に大量の精液をぶちまけた、ブラック・フォビュラスの男性器が、だめ、今そんなもの鼻先に突きつけられたら……

「あはは、レッドさんも釘付けですね。美味しそうですね。私の精液特別製ですから直で出されると凄いですよ。唇の痛みとかすぐに忘れちゃいますからね」

「あ、つく、そんな精液のニオイ……ふあ、こんなくっさい、もの、なんで……」

今も全体にべったりとこびりついている臭い白濁液、鼻先に持つてこられたことで精液の鼻につくにおいが数倍濃くなつて……こんなものを、こんなものを、ふあ、口に押し付けられてまるでキスしてるみたいに、ん、ちゅ、うう、これは、快楽をごまかすためで、仕方ないんだ、ふあ、あ、あ、ああ……

「ん、つぶ、んん!？ ちゅぶっ、んくう、ん、んん」

「ほらほら、もつとのどまで使っちゃっておちんぼ扱いてください!」

た、耐えないと。でも、これは……うでほどもある凶悪な男性器を喉元まで突き込まれたのに、口の中に広がるせ、精液のニオイと舌に感じられる味に、体が喜んで!？ ごくごくと精液飲み込みたくて喉が鳴って、おっぱいの中いじくられてる快感と合わさって……

「あは、触手の隙間から愛液こんなにたらしちゃって、イキます？ イっちゃうと催眠でエツチになっちゃいますけど我慢できずにイっちゃいます?」

こんな、こんなことぐらいで、負けるなんて……あ、あきらめなければ、いままでも乗り切れてきたんだ……聡、力を貸してくれ。

「あ、あ、あああ、出ます。私のフタナリちゃんぽミルクいっぱいごくごくしてください！」
そんな、私をあざ笑うかのようにブラック・フォビュラスは男性器を私の喉の奥まで突き入れて躊躇なく射精した。んふあ！？ 口の中から食道、鼻にまで逆流して、精液！？ 頭の中まで精液でいっぱいになりつぶしやれる！？

「あは、レッドの身体、びっくんびっくんってなってる。そんなに私の精液美味しかったですか？」

ブラック・フォビュラスの言葉も聞こえずに暴れまわる快楽に崩れ落ちる。

「お口からこんなにあふれて、もったいないですよ。ん、ちゅば、ん、ちゅ」

「ん、ごく、ん、んん！？」

「初イきから、どれだけイっちゃってるんですか。もつと耐えて……あれ？ んー、装置の感度のせいで今の全部で1回イきにカウントされたみたいですね。5回はイってたと思ったのに。失敗失敗。とりあえず、設定を直してっと」

精液のおかげでなんとか心を落ち着かせて気絶することは避けた……いや、これも催眠で書きこまれたものだった。しかし、それを利用してでも気を持たせないと。

「そ、れ、で、気持ちよかったですか？ 詳しく教えて下さい、ね？」

【ジュエル・レッド(赤壁あかね)はオプト・ムーンの怪人に質問されたといは答えなければいけない】

「そんなこ、くう、う、乳首に張り付けられた触手は吸着式マッサージ機のようなしみこむ気持ちよさで、徐々に針を乳首の中に差し込まれた時が一番気持ちよくて耐えるのに必死だったな。え……そのあとの、女性器とお、おしりに、く、口が、触手を吸いつけられた時は、一瞬、気が飛ぶほどの快楽で、うう、直後に口に男性器を、つく、押し込まれて大好きな精液に注意が行かなかったらイっていたかもしれない。な、なんとか男性器に残った精液の味を味わって耐えていたが、直接口に出された時のニオイがあんなに強烈だとは思わなかった……口の中に濃厚な精液があふれた瞬間、真っ白になっていくのが止まらなくなつたな。なつ、どうなつて……」

「ペナルティーですよ。ペナルティー。初めなので定番の催眠ですけどね。ふふふ、詳しく教えてくれてありがとうございます。特に、私の精液の感想とっても良かったですよ？」

「あ、そうそう、改造したおっぱいの試運転しちやいましょう！ ふふふ、おっぱいと乳首の大きさも一回り大きくなってすごくくだらない感じで素敵でしょ？ これからいっぱいミルク作ってくれる下品なおっぱいですよね」

「なつ、ん、あ、んんん！？ み、ミルクだど！？？」

「え、聞いてませんでした？ ミルク、レッドさんのおっぱい改造して妊娠してなくてもいつでも母乳が出せるようにしちゃいました。ふふふ、初母乳、いっぱい出しましょうね」
会話しながらもブラック・フオビユラスの手は止まらず、執拗に私の乳房の乳首周辺を刺激し続けている。針を差し込まれた時とは違う感覚が、乳房全体のむず痒くなって……

「あれー、出が悪いですね。んー、もう一度ぶすつとやって広げてみるかな？」

「ひい、だめ！？ やめて！」

「あはは、そんな、襲われた女の子みたいな声出しちゃいけないですよ、レッドさん？」
今度は最初から針を露出したまま近づいてくる触手。今刺激されるとお！？

「んひいいい！？ あ、ああ、だめ、んはあ、止まらない！？」

【ジュエル・レッド(赤壁あかね)はイきたいと思わない限りいくことはない】

「お、無事開通しましたね。すっごい勢いでミルク出しちゃって、うんうん、改造で乳首の中心にミルク穴開けておいたんですよ。これで、おちんちんみたいにビュービューってミルク出せるからすっごい気持ちいいでしょ？」

「は、はいい！ 気持ちいい、ミルク出すの気持ちいい！？ つく、あ、だめだ、いっちゃ……ん、んん！？」

「ぎりぎり耐えちゃった。むう意外に手ごわいですね……あ、そうだせっかくの初母乳を出しっぱなしはもったいないですよね？」

「な、何んだそれ！？ ち、近づけないで……」

「ふふふー、私特製の搾乳触手ちゃんです。だらしくビュッビュって出しっぱなしのレッドのおっぱいにびったり張り付けて……ん、搾乳開始！」

「んんん！？ おふおあ！？？ すってる！？ おっぱい吸っちゃって……ん、あ、あ、あ、なにこれ！？ だめ、きもちいいのが同時にい！？ いや、止めてえ！？？」

「レッドさんのミルクどんどんたまっていきますよ。さつき、いっぱい水分補給してよかったですねー、また喉が渴いたらいっぱいザーメンご馳走してあげますから、遠慮なくいってくださいね」

あひい！？ ダメ、こんなの……いや、ここで耐えないと、みんな、力を貸してくれ……

「すごいですね。結構自信あったんですけどあれだけ攻められて最初にミルクを噴出した時の1回だけしか、イかなかって。私なら、幸せ過ぎて意識飛ぶぐらいイっちゃってますよ」

「はあ、はあ、はあっ……」

ブラック・フォビュラスへの返答もままならない……いまだだけ経ったんだろう。つく、弱気になるな。ここで耐えないと……

「そうそう、今回のペナルティー言ってますでしたよね。パンパかパーン！　なんと、今回はレッドが自分でイきたいと思わない限りイけないというボーナス催眠です！　耐えられるのは1回限りだけどうまく活用して頑張ってくださいね」

つく、完全に遊ばれてる……だが、いままでもこういう敵の油断でピンチを乗り切れたこともあるんだ。ありがたく使わせてもらおう。

「ふふふ、目に活力が戻ってきましたね。いいですよ、いいですよ。普通の人なら1発で催眠にかかっちゃって飽きちゃうんですね。だから、いっぱい楽しみましょうね」

「ねえ、ねえ、ちょっと味見していいかな？」

「えー、レンちゃん、ホワイトがいるからいいって言ってたのに――」

「ごめんごめん、でも、あんな声聞いてたら。我慢できなくなっちゃっうから仕方ないよ」

「まあいつか、それじゃあ一緒に改造具合を試してみる？」

「うん、一緒に入れちゃおうか」

目の前に元ブルー、カオス・フェンリルが近づいてきて、自身の男根を私の女性器の入り口にぴったり押し付けてくる。

「や、やめ」

「せーの」

当然私の声など無視して二人の男根が前後に差し込まれ……んぎい！？　入り口の鬼頭が一気に奥まで差し込まれるまでの感触が妙にくっきりと快楽として伝わって……：ひう！？？　落ち着く間もなく引き抜かれ、男根のカリ首が！？　敏感なところをひつかいてえ！？

「んあ、ふう……あああ、なにこれ！？　凶悪なぐらいに気持ちいいよ……！」

「あはは、凄いでしょ。どんな極太改造ちゃんぽでもしっかり飲み込んで膣内全部で気持ちよくなっちゃえるスペシャル仕様だよ？」

「すごいすごい、僕のどうぶつチンポ根元までぎゅって入っちゃって、あ、ノノのおちんちんの先っぽとこっんしちやってるのわかるよ」

改造された前後の穴は開いても自分も気持ちよくなれるようにたくさんの潤滑水を出し、ずちゅずちゅと大きな音を立てて、二人の男根を飲み込んでいる。

「ん、ん、ん　っーっ」

「ちょっとやそつとでは壊れないから思いっきりやっちゃって、試運転してみてね。私もいっぱい動いて気持ちよくしてあげる」

二つの凶悪な肉棒が私の中で暴れまわる。内臓がかき回されるほどのピストンなのに痛みは無く、洪水のような快感があふれてくる。……そ、それでも、口惜しいがさっきの催眠で自分の意思でイかないことを選べるならっ……

「簡単に壊れないのいいね。ノノと二つ穴ずぼずぼしちやったら大概の怪人さん達でもすぐ壊れちゃうからつまらなかったんだよ。うん、これなら本気でピストンしてあげてもいいよね」

「そうそう、思いっきりやっちゃおうよ。レッドもまだまだいけるって目してるしね」

「いや、だ、だめ!?!」

ん、んあん!?! 挿入のそ、速度が、2段階ぐらい……んひい!?! い、いきが、呼吸はしてるのに10分以上水の底で息を止めているような、く、苦しくなんて、でも、心臓の鼓動がどんどん、大きくなって、んお!?! んぐう!?!? た、耐えないと、こんなと、ふううう!?! ホワイトを、みんなをまも……

”ぴきつ”と首元で何かの音がした。それが何だったのか理解する前に体がはじけ飛んだと錯覚するぐらいの快感が、いつてる!?! なんで!?!

「んあ!?!? いひい!?!? な、なんで、イこうとお、んん!?! 思ってる。思ってるのに!?!」

【ジュエル・レッド(赤壁あかね)は絶頂を迎えるたびに感度が倍になる】

「えーそんなこと言われても? 心の奥底でちらつとイきたいって思ってたんじゃない?」
「そんなのもうどうでもいいじゃない、イっちゃったものは止められないよね。ふふふ、いっぱい気持ちよくしてくれたお礼に、たくさん精液出してあげるね。いつてる時に中に精液ドブドブ出されるのすっごい気持ちいいんだよ」

【ジュエル・レッド(赤壁あかね)は人目に自分の身体をさらすことが恥ずかしく感じる】

いくの、止まら、ない!?! だめ、あ、ひう、しょんな!?! どんどんさいみんがかき、こま、えれ、んああああ!?!

「あ、ん、私も一緒に。ふふふ、オナホール改造と一緒に子宮も直腸もザーメンをとつても美味しく感じられるように改造してあるから、中出しはさっこうに気持ちいいよ、覚悟しててね」

【ジュエル・レッド(赤壁あかね)は……】

お”、あ”、ん、だめ、私は、”……みんなをまもる、せい、せいえき、あ、なかにいっぱいい！？？ どぶ、どびゅ出されてるのわかつちゃう！？ 子宮も直腸もくっさい精液でいっぱいになって、あ、あ、ああ……

「これは聞いて無いんじゃないかな？ もうイっぱなしで……あれ、勝負はどうなったの？」

「んー、あ、もうだいぶ前に10回目の絶頂行ってたみたいカンストしてるね。まあ、せっかくだし最後に中に濃い精液ご試走してあげようよ」

「10個も！？ ふっくく、それはとびっきりの変態さんに書き込まれちゃったね」

「えーっと、かかつちやた催眠は一度絶頂を迎えるたびに感度が倍になるとか、人目に自分の身体をさらすことが恥ずかしく感じるとか、精神的なドMになるとか……まあいいか。ド変態な正義の味方さんの完成だね」

「あはは、それじゃあ、今は感度3000倍以上なのかどこまで耐えられるか見ものだね。いっぱい大好物の精液注いであげるね」

「ひゃ、ん、んん、しえいえき、あ、ああ、もう、あひい！ んあ、ひう、た、えきれ、んん！？？」

「もう、何言ってるかわからないよ。でも、私もレッドの大好きな精液を沢山注ぎ込んであげるからいっぱいいってもいいんだよ」

「んんっ、おしりの入り口がおちんちんの首筋に食いつて……あ、いいよ、これ凄い、イク、ん、ノノ一緒にいっぱいぶちまけようね！」

「うんうん、改造成功だね。ザーメンを一番搾り取りやすいように前も後ろもキュッキュツてしまつて吸い取る準備始めてる。お望み通り沢山注いであげるから、壊れちゃだめですよ負け犬さん？」

「いやあ！？ 壊れる、頭の中、焼きついちゃう！？？ んひいいいい！？？」

同時に大量の精液を出された私は獣のような声を上げて意識を失った。